



Title	<書評> R.W.Connell, "Masculinities", University of California Press, 1995
Author(s)	高橋, 香
Citation	年報人間科学. 1996, 17, p. 253-257
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12208
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

R. W. Connell

Masculinities

University of California Press, 1995

高橋 香

日本でも、最近、男性学・男性研究にたいする関心が高まってきている。英語圏においては、十年ほど前から注目を集めるようになったものの、ユング心理学にもとづいた男性性セラピーに見られるような心理学的なアプローチが多く、本書のように社会学的な立場から包括的に論じているものはほとんどない。その意味で、本書は男性研究を志す人にとって、一度は読むべき貴重な研究書であるといえるだろう。著者のConnellは、オーストラリア出身で、現在はカリフォルニア大学サンタ・クルツ校に籍をおく社会学教授である。ジェンダーについて体系的に論じた大著『ジェンダーと権力』は、日本語にも翻訳されている。男性の複数性、ヘゲモニ的男性性、コンフィギュレーションといった概念は、『ジェンダーと権力』と同様に本書においても重要な概念となっている。これらの概念については後で詳しく述べる。ただ、これまで女性対男性の図式で単一の集団として論じられがちであった男性の多様性に着目した点、ジェンダーの在り方を固定したものではなく、その社会性・歴史性を強く打ち出している点は、注目に値する。

本書は三部構成である。各部分が、必ずしも理論的に一貫しているわけではなく、単に男性性に関することは何もかも盛り込んでしまったような教科書的な印象は免れない。しかし、今を生きている具体的な男性たちの生活史の中に、男性性の変化への可能性を示す兆しを見つけたそうとする著者の態度は、評価に値するものである。

第一部「知識とその問題」は、男性性の理解の仕方について検討している。第一章「男性性の科学」では男性性に関してのアカデミ

ツクな系譜を整理し、第二章「男性の身体」では、ヘゲモニー的男性性(後述)を変化させ得る一つの契機として、物質的なものとしての身体を扱っている。具体的な身体を社会理論に組み込もうとする姿勢は、これまでなされてきていないだけに、高く評価されていだろう。

ついで第三章「男性性の社会的組織」は、ジェンダー分析の基礎になる枠組みを提示している。ここではジェンダーを「社会的実践の構造」とし、ジェンダー構造の三重のモデルについて述べている。

(1) 権力関係、(2) 生産関係、(3) カセクシス(cathexis)関係である。(1)は、フェミニズムが「家父長制」と呼んでいるものに対応しており、(2)は分業をさしている。(3)は、欲望を形成し実現する過程のことで、「性的欲求は社会理論から排除されてきたが、欲求を形成し実現する実践は、ジェンダー秩序の一面である」(74頁)と位置つけている。このようにジェンダーは社会構造であるので、それは必然的にはかの社会構造と関わり合う。ジェンダーを理解するには、階級や人種、地球規模の不平等に関する知識が必要であり、逆にそれらを理解するには、ジェンダー理解が必要である。著者は、こういった関わり合いにも、ジェンダー・コンフィギュレーションの変革の契機を見いだしている。さらに、複数の男性性相互の関係を検討するために、現代の西洋のジェンダー秩序における男性性の三つのパターンを分析している。(a)ヘゲモニー的男性性、(b)従属的(subordinate)男性性、(c)共犯的(complicit)男性性である。(a)ヘゲモニー的男性性は、「家父

長制の正統性の問題に対して現在受け入れられている答を具体化する、ジェンダー実践のコンフィギュレーション」であり、「男性の支配的な位置と女性の従属を保証する」(77頁)ものである。それはまた、女性の挑戦を受けて歴史的に変化する。(b)従属的男性性は、男性グループ間に、支配/従属といった特定のジェンダー関係が存在することによって生じるものである。代表的なのが、ヘテロセクシュアルの男性の支配とホモセクシュアルの男性の従属であり、ホモセクシュアルの男性性は、男性の間のジェンダーヒエラルキーの最下位に位置付けられている。また、ホモセクシュアルの男性は、ヘゲモニー的男性性の観点から、女性性に親和的であるときとされている。その他、正統性の領域から排除されるヘテロセクシュアルの男性も、「女々しい男」などと女性性と結びつけて形容される。(c)共犯的男性性は、ヘゲモニー的男性性を厳密に実践することなく、つまり、「家父長制の第一線で闘うことによる緊張や危険にさらされずに」、「家父長制からの配当を実現するということによって形成される男性性」(79頁)である。

以上、男性性と一口にいても、実はそれは複数であり、複数の男性性からなる諸関係が形成されているということ、そしてそこに、ジェンダー・コンフィギュレーションの変化の契機を見いだすことができるのだというのが著者の主張である。

第二部「男性性のダイナミクスの四つの研究」では、第一部で示された理論的枠組みを使って、具体的な考察がなされている。これは、著者自身がシンドニーに住む男性にインタビューをし、それによ

って得られた生活史をもとになされたものである。ここでは、前述の三重のジェンダー構造の変化によって生じたプレッシャーにさらされ、男性性を変革する必要性に迫られている人々を対象にしている。第四章「素速く生きて若く死ぬ」は、生産関係が変化することによって雇用される女性が増える一方で、慢性的な失業・半失業の状態におかれている、労働者階級、ブルーカラーの男性に焦点を当てている。ここで強調されているのは、同じ状況から異なる男性性が分岐してくるということである。

ついで第五章「全体的な新世界」は、権力関係の変化に関するもので、環境運動を通じてフェミニズムを経験し、自分たちの男性性を改革しようと試みた男性のグループに焦点を当てている。権力関係の変化は、ヘゲモニー的男性性を直接に脅かすものである。彼らは性差別主義者とされることに罪の意識を感じ、それによって男性性を改革しようとするのだが、同性愛嫌い (homophobia) の社会で、男性同士が感情豊かに接することは難しい。個人的なレベルで男性性を改革しようとするこの限界を、ここで著者は指摘している。第六章「全くのストレートなゲイ」は、カセクシス関係の変化に関するもので、ヘテロセクシュアルの男性とゲイとの関係を、集合的な関係として扱っている。ゲイは、ヘゲモニー的男性性に全面的に反対するわけではないが、何らかの形でヘゲモニー的男性性から距離を取る必要に迫られる。集合的なものとしてのこのようなゲイのあり方は、ジェンダー秩序にとって矛盾を孕むものである。社会的な規模でジェンダーに影響を与えるヘテロセクシュアルの男性

とゲイとの関係を、著者は現代西洋世界の男性間の関係において、もっとも問題を孕むものとして位置付けている。第七章「理性的な男性」は、技術的な知識にもとづいた職業に就いている、中流階級の男性に焦点を当てている。ここでは、家長制的な男性性と合理性との結びつきに、ヘゲモニー的男性性の変化への可能性があるとということが主張されている。つまり、企業などにおいて、女性を支配することを正統化する家長制と、有能な女性を高い地位につけるという合理性が矛盾することがある、この矛盾こそが変化への鍵になる。

最後の第三部「歴史と政治」は、第一部で述べた分析枠組みを用いつつ、第二部で明らかにした男性性の現状を念頭に置いて、西洋近代的な男性性の歴史と、現在の男性性ポリティクス、そして男性性の今後の見通しについて述べている。

第八章「男性性の歴史」は、男性性は歴史的なものであるということをまず指摘し、その歴史について述べたものである。議論はヨーロッパとアメリカの男性性を中心になされる。なぜならヨーロッパ／アメリカの男性性は、それら自身の文化を支配的なものにした世界的規模の暴力と密接に関連しているため、他の文化圏のそれとは性質を異にするからである。ヨーロッパ／アメリカの男性性が生み出されたのは、およそ一四五〇年から一六五〇年の期間である。これらの男性性を生み出すための重要な契機が四つ挙げられている。第一の契機は、文化の変化である。これは都市化したヨーロッパにおいてセクシュアリティと人間らしさ (personhood) にたいする

新しい解釈を生じさせることになった。つまり、強制的なヘテロセクシュアリティが文化的に権威をもつようになり、さらに個人主義と自律的自我の概念が強調されるようになったのである。二番目の契機が、ポルトガルやスペインによって海外帝国が創造されたことである。帝国の創造は、その初めからジェンダー化された企てであった。つまり、男性が兵隊や海外貿易といった職業を独占し、「征服者」が、現代の意味での男性性の文化的型として初めて定義されたのである。三番目の契機は、商業資本主義の中心となった都市の成長である。これによって日常生活の条件が変化し、個人主義がより徹底化された。最後がヨーロッパの市民戦争である。この戦争によって混乱させられたのは、階級秩序であり、ジェンダー秩序であった。

このような社会変動を経て、十八世紀には、近代的な意味での男性性の祖型が現れる。つまり、女性性に対立するものとして、また経済や国家に制度化されたものとして定義される男性性である。この男性性は、世襲的な土地所有者である上流階級の男性に体现される。具体的な特徴としては、商人ほど計算的な合理性は有しておらず、親族関係が強いため孤立した個人の概念にもとづくものでもない。また、地方行政を担当しているの、国家との結びつきも緊密である。軍隊の主要員でもあり、名誉のためなら決闘も辞さない。家庭では女性を支配し、農業労働者に対してはこれを統制するため乱暴な手段を用いる。すなわち、この男性性の体现者は、国家の主要な担い手であると同時に家の支配者であり、その男性性を実現す

るための暴力性も備えている。

それ以降、二百年間のヨーロッパ／アメリカの男性性の歴史は、この男性性の祖型の分裂、その新しいヘゲモニー的なものへの置き換え、従属的な男性性、そしてジェンダー構造と他の社会構造とが交差するところに現れるマージナルな男性性の出現として理解される。

このような歴史過程において生じた男性性は、ジェンダーの布置状況の中でさまざまな政治的対立や運動を引き起こすことになる。

第九章「男性性ポリティクス」は、主に四つの男性性ポリティクスについて説明している。まず、男性性セラピーである。これは、ジェンダーの矛盾する諸関係によって傷ついた異性愛の男性を癒すものである。著者はこれを、フェミニズムによって喚起された「罪の意識」を個人的にしか解決しないものとして、共犯的男性性であるとしている。次に、ヘゲモニー的男性性を擁護するものとして、ガン・ロビーを取り上げている。これはオーストラリアでの銃廃止の動きに対する反動である。銃はベニスのシンボルであると同時にその組織や雑誌は男性性による男性のためのものであり、従って、銃の所有権を擁護することは、象徴・実践の両レベルにおいてヘゲモニー的男性性を擁護することであるとしている。その他ヘゲモニー的男性性を擁護するものとして、ハリウッドの映画、雑誌『プレイボーイ』などが挙げられている。三番目に、ゲイ・リベレーションを挙げている。西洋近代史においてヘゲモニー的男性性に代わる主な選択肢となるのが、ホモセクシュアルな男性性である。ホモセク

シユアルな男性性が安定して存在することによって、ジェンダーに揺らぎを与える。最後に挙げられているのが、「服装倒錯」や「性倒錯」などに見られる退去 (exit) ポリティクスである。これらを単なる症候群としてではなく、文化的ポリティクスとして扱うことによって、男性の性差別主義に対する対抗ポリティクスへとつながる。異性愛の (straight) 男性であっても、家長長制に反対し、ヘゲモニーのおよび共犯的男性性の世界から出て行こうとすることができる。

最終章である第十章「実践とユートピア」では、男性性の今後の見通しと、変革するための方法が述べられている。そして、最良の男性性ポリティクスへの視点は、さまざまなグループがそれぞれの利害の重なり合いを主張するような、連合ポリティクス (alliance politics) であるという。

あくまで現実を見据え、多様で複雑な現実の中に男性性の変化への契機を見つけたさうとする著者の態度は、非常に好感の持てるものである。著者が向いているのは家長長制廃止への方向である、たとえそういう方向でなくとも、少しでも生きやすい社会を望む男女にとって、ジェンダー構造変革のさまざまな可能性を示唆する本書は、十分に活用できるものである。個体としての男性ではなく、「男性性」とすることによって、男性の多様性だけではなく、女性の中にある多様な「男性性」をも分析の対象とするという視野も開けてくる。このことによって、ジェンダー・コンフィギュレーション内部での複雑な政治的駆け引きも分析できるようになる。女性性を身

につけるように社会化されながらも、抑圧に対する反発、あるいは社会進出など多様な経験の中で、何らかの男性性を自分に取り込んでいく必要に迫られる女性も多い。従って、このことは女性自身の多様性を分析することへもつながる。そのずつと先には、男性性／女性性という区別そのものが無意味になるような、つまり、個体としての男性／女性に関わらず、それらが個人の生き方に沿う形で自由に選択し得るものになるような地平が開けてくるのかも示れない。